

古語のふみあと

工藤力男

はじめに

福井県は、我が住む岐阜県と北西部の山岳地帯で隣接する、名にし負う恐竜化石の出土地で、県立大学には恐竜学部も開設されている。その県域で新しい化石が発見され、「何億年前」などと報ぜられると、わたしは、己れの生きた時間と営みの短さについて考えこんでしまう。

自分が研究対象にしてきた日本語は、この列島で用いられるようになってから、いかほどの時間が経過したか不明であるが、それが文字で記され始めたのは、せいぜい千五百年まえである。恐竜の生きていた時代とは比べることさえ無意味な短さである。

その短い時間のうちにも、言葉にはそれぞれの歴史がある。日本の古語は、どのように生まれ、どのように育ち、また、どのように変わってきたのだろうか。本稿は、そうした視点から、いくつかの古語の歩んできた跡をたどる試みの一つである。

本稿の趣旨に通ずる問題意識から、わたしは先に「文語は遠くなりけり」を書いて^(注1)いる。合わせて読んでいただけたら、幸いである。

引用歌に『国歌大観』の歌番号を附することがある。

文献の成立年次を元号の暦年で示すことがある。

本稿では敬称を省略する。

すじ

何を今さら、と思う人もあるだろうが、それは承知の上で初めに挙げた。

「すじ」は、萬葉集卷第一の巻頭歌に出現する語である。

泊瀬の朝倉の宮で治世した雄略天皇作歌の、「籠毛与 美籠母乳 布久思毛与 美夫君志持 此岳尔 菜採須兒」と続く長歌の第六句、傍線部を「なつむすじ」と読むことよつて生まれた。同様に「すじ」と読みうる箇所を寛永版本で示すと、「小田苅為子」(1275)、「伊渡為兒者」(1742)、「山田守酢兒」(2156)などがある。右の巻頭歌では、野外で菜をつむという状況から、身分の高からぬ女性と解し、文字に従つた不注意な読みから「すじ」が生まれて受けつがれたようだ。

この語形を明確に否定した早い著作は、本居宣長の『萬葉集玉の小琴』(安永八年刊)であろう。だが、明治時代の辞書には、なお「賤子」の意で登載され、ヘボンの『和英語林集成』(第三版 明治十九年)にも、「ナツムスゴ」の用例を載せるほど広く流通したようである。昭和期の『大言海』も「シッコ(賤子)の約」としている。

ヘボンがこの語を収載した経緯は知りえないように、ひとつ不思議なことがある。その語義を「A boy, lad——of lower classes:」など、男性と限った記述になっていることである。依拠した資料にそんな記述があったのだろうか。とまれ、萬葉集の読解が精細になって、「すじ」は辞書からも消えたのであった。

のもせ

平安朝の和歌にも、前項に似た状況で生まれた歌語がある。それを、第二の勅撰和歌集である後撰和歌集から一首を引いて示す。

秋来ればのもせに虫の織り乱る声の綾をば誰か着るらむ
藤原元臣朝臣 262

歌意は明白で、傍線部は「野も狭いくらいに」といった意味であろう。

この形式の表現は、萬葉集の「心もしのいにしへ思ほゆ」(柿本人麻呂 266)、「みやまもさやに落ちたぎつ」(笠金村 920)、「滝もとごころに落つる白波」(雑歌 3233)などに見る、「体言・も・X・に」の形で古代和歌には多く見ら

れる。ここに「X」で表示したのは、副詞の語基や形容動詞語幹など、言わば自立語以前とでも称すべき、状態を表わす語の類いである。

次に新古今和歌集の一首を、日本古典文学大系本から引く。

よられつる野もせの草のかげろひて涼しくもる夕立の

空 西行法師 263

この本では、第二句の頭注に「野一面の夏草」とするだけで、語構成については言及していない。萬葉歌では助詞「に」で括られた副詞句として実現したのとは異なり、ここでは、格助詞「の」で受けられ、連体句として機能している。「のもせ」は一つの名詞として扱われ、「のもせの・虫の／露に／月の」などと詠まれるようになる。現行の国語辞書がその語義を、「野のおも」「野面」「野原」などと記述するのは、当然である。

鎌倉時代に編まれた特異な語源解釈書『名語記』巻八には、
 「モセニトイヘル詞アリ 山モセニ庭モセニ 野モセニナト也」などとあり、「モ」を助詞らしく小書きしているのに、「モセニ」を一語として扱い、「セ」に「狭い」の意を汲むことさえしていないようである。著者経尊の特異な解釈ではあるが、この時代の一つの理解である。

王朝和歌のこの語法はいつまで持続したのだろうか。曲亭馬琴の『椿説弓張月』前篇巻之三の第六回には、「寐覚わびしきわが宿の、掃もはらはぬ庭面へ、物の落つる響せしが」が見える。『日本国語大辞典』第二版に掲げる高山樗牛『瀧口入道』の「まだ露下りぬ野面（フモセ）に、我が袖のみぞ早や沾ひける」は、明治廿九年の作である。

みずずかる

時代の空気ゆえか、音楽の先生の情熱ゆえか、わたしは中学校の音楽の時間に「新国民歌」を教わった。中学校を卒業してからは、うたったことがないが、その旋律と一番の歌詞は、今も覚えてる。

われら愛す

胸せまる あつきおもひに

この国を われら愛す

しらぬ火 筑紫のうみべ

みずずかる 信濃のやまべ

われら愛す

この国の 空の青さよ

この国の 水の清さよ

この歌詞の「みすずかる信濃」は萬葉歌に発している。巻第二、久米禪師が石川郎女に求婚したときの歌の初二句に「水薦苺信濃の真弓」(96)、郎女の返歌に「三薦苺信濃の真弓」(97)と見えるのである。

『校本萬葉集』の記述を手がかりに経過をたどると、初句の原文は、江戸時代半ば以降、賀茂眞淵門下による本文「水薦苺」が採られて、『萬葉童蒙抄』の訓「みすずかる」が勢力を広げたらしい。「新国民歌」の歌詞もそれによるのだらう。

萬葉集の両歌の冒頭、原文は「水薦苺」と「三薦苺」で、平安時代の写本の訓は「みこもかる」であった。この文字列ではこの訓以外に考えられないのだが、鎌倉時代に「みくさかる」の訓が提唱され、「薦」の草冠を竹冠に代えた字が行われ、萬葉童蒙抄の訓「みすずかる」が流通したようである。江戸時代後期、萬葉集の研究が進むにつれて「みすずかる」の訓は後退し、「水薦」の本文に沿った「みこも刈る」が流通するようになった。『萬葉集總索引漢字篇』によると、「薦」の字は、「苺薦」、「薦畳」、「畳薦」など十種の語に用いられて、読みは「こも／こも」であって、それ以外の訓は右

の「みすず」だけである。「薦」を「すず」と読むことが、いかに特異であるかは明白である。

数年まえ、市民相手の萬葉集の講義で、偶然この歌に触れることがあった。すると、それを校歌がわりにうたったという受講者がいた。岐阜大学教育学部附属中学校の生徒時代だという。その学部に十六年半勤務したわたしが初めて聞く話であった。

『ウイキペディア』で「新国民歌」を検索すると、その誕生と受容に関する記述がある。提唱者は佐治敬三。太平洋戦争の暗い記憶から解き放たれたい願望から、フランス国歌のような国民歌を作ろうとしたのである。これは、いくつかの学校、特に、サントリー酒造の会社に繋がる、佐治家や鳥井家にゆかりの学校で長く歌い継がれたという。

以上、「すこ」、「のもせ」、「みすずかる」、いずれも古歌に発する語で、それなりに優勢な時期もあったが、研究の進展につれて消えさった。これらは特殊な部類に属すると言えるだろうが、古語の踏み跡の一つである。

たまゆら

萬葉歌の訓に出現した「たまゆら」は難語の一つである。

『萬葉集総索引単語篇』によると、巻第十一に一例だけの「孤語」である。「柿本朝臣麻呂歌集」の一首だというそれを、初句に原文を残して寛永版本から掲げる。

玉響昨日の夕へ見しものを今日のあしたに恋ふべきもの
か (391)

この巻を伝える平安時代の写本は知られていないが、初句の訓は「たまゆらに」と「たまひ、き」が伝えられている。この文字列なら、後者の「たまひびき」が自然なはずなのに、多くの古写本が「たまゆらに」の訓を伝えているのはなぜだろう。だが、本稿は萬葉集の訓詁を論ずる場ではないので、論述に不可欠な要点の紹介に絞ることにする。

澤瀉久孝は、論考「玉響」攷（昭和十一年）、その増補（同十五年）で、荒木田久老『萬葉考榷乃落葉』別記の説「響は、玉の音の、さやかなる意」を借りたものとして、「玉響」二字を「まさやかに」または「さやかに」と読むことを提案した。「さやか」は、玉の触れて発する音色がさやか

だというのである。これは、佐伯梅友と共著の『新校萬葉集』（昭和廿四年）で、当該歌の訓「まさやかに」に採用した。

その十三年後、澤瀉は『萬葉集注釋』（昭和卅七年）で、当該句に三ページを費やす訓釈を書いた。その中に、弟子の佐竹昭広が論文「音と光——玉響」解説の方法」（『國語文』第廿二巻八号 昭和二十八年）で提示した「たまかぎる」説を紹介した。しかし、結局、それは採らず、原文の右に「マサヤカニ」、左に「タマカギル」と附訓するという、じつに異様な処理をしたのであった。

「タマカギル」を『萬葉集総索引単語篇』で検すると、五種類の表記で十一例が得られる。その用例数を示すと、「玉限」三、「玉蜻」五、「玉蜻蜓」一、「珠蜻」一となる。ほかに「玉垣人」一があり、世上には「タマカギル」の訓が流通しているが、「垣」の字を「カギ」と読むことはできないので、この訓は成り立たない。むしろ、「玉垣」の連濁形「タマガキ」による「タマカギル」と読まれるはずなので、本稿の考察からは除く。

漢語「蜻蛉」について、廿巻本『和名類聚抄』に「和名加介呂布」の注があり、平安時代の女性の書いた「蜻蛉日記」

が「かげろふ日記」とも書かれるように、「カゲル／カゲロヒ／カゲロフ」の語形は自然に想定できる。右に挙げた萬葉集の「玉蜻」以下の文字列が「タマカギル」と読まれたことも、特に飛躍しているわけではない。そこに、本稿が取り上げた「玉響」の訓の割りこむ根拠は何か、という問題が待っている。

右に引いた佐竹昭広の説は、人間の共感覚が言語表現に反映するという事実を、萬葉集の訓詁に応用したものである。

東西の言語学の知見を駆使した緻密な論証を短く紹介することは至難である。そこで、佐竹自身が校注作業に加わった日本古典文学全集『萬葉集』（小学館 昭和四十八年）から、「玉かぎる」の頭注を引いて示そう。

夕の枕詞。カギルは光る意であるが、これに「響」の字をあてたのは、聴覚と視覚との通様相的な性格に基づく。「玲瓏」という漢語も図書寮本『類聚名義抄』に「玉声、…（玲瓏）トナル、カ、ヤイテ」とあり、聴覚・視覚両者を兼ねた訓が示されている。

右の「…（玲瓏）」は、『類聚名義抄』に、先行する文字列「玲瓏」を「―」で示してあるのを、点線に替えて引いたものである。

「かげ」は、現代日本語でも、「木陰」「日陰」など光の当たらない部分を表現する一方、「月影」「人影」などでは、光そのものや、それを受けた物の状態を言う。現在は、その違いを漢字で書き分けることがふつうである。

近年刊行される萬葉集の注釈書では、この佐竹の説による「たまかぎる」の訓を採ることが一般である。もつとも、これに賛同しない論者もあることを、かつてわたしは、『成城国文学』廿五号の「この一篇」欄で触れた。何しろ紙幅は二ページ、佐竹の論の称揚が目的だったので、その稿末に「本論を正面から批判した論考が『渡瀬昌忠著作集』第一巻第一章にある。」と書くにとどまった。

昭和五十五年、佐竹は自身の萬葉集関係の論考をまとめた『萬葉集抜書』を出したが、それには「音と光」が収められていない。その没後に刊行された『佐竹昭広集』の第二巻『言語の深奥』（岩波書店 平成廿一年）の上野英二の解説によると、「根本的な誤りがある」ということだったらしい。

とまれ、枕詞に由来する古語「たまゆら」は、その存立基盤が崩れざる事態に瀕しているわけである。だが、萬葉歌の訓法などに関わらない多くの日本人にとつても、この古語は魅力的なので、現代短歌には、なお多くの用例が見える。日

本短歌総研編著『短歌用語辞典』（飯塚書店 令和元年）には、「かすか。ちらりと。転じて、しばらく。しばし。ほんの少しの間。」として、太田水穂から緒方美恵子までの四人の作を載せている。

川端康成の短篇小説「たまゆら」（昭和廿六年）は、この語を標題にしている。亡くなった女性の遺品の勾玉をめぐる話で、二三個の勾玉を糸に通し、静かに揺らすときに発する音を「たまゆら」と呼んでいたという。「はかなさ」とでも言えそうな雰囲気揺曳させそうに思われる。

この語なら、宝飾店の屋号に用いられそうに思うのだが、わたしの住む町とその周辺には見当たらない。現在の日本人にはよほど縁どおい古語のようである。ネット上で拾ったのは、大阪府松原市で作業着を製造販売する会社名と、和歌山県海草郡のリゾート施設「たまゆらの里」である。いずれも命名の意図は分からない。

さとわ

大正十四年発表の文部省唱歌「朧月夜」の二番の歌詞を、ワイド版岩波文庫『日本唱歌集』から引く。散文並みの句読

法が興味ぶかい。

里わの火影も、森の色も、

田中の小路をたどる人も、

蛙のなくねも、かねの音も、

さながら霞める朧月夜。

右には省いた振仮名によると、「蛙」の「かはづ」も本稿の対象になりうるし、「さながら」も同様だが、ここでは、冒頭の「里わ」に限る。

日本人には、この歌によって郷愁をそそられる年配者が多いのではあるまいか。かく申すわたしは、この歌に描かれたような環境に生育した者ではないのに、強い郷愁を呼び起こされ、同じ高野辰之作詞、岡野貞一作曲の『故郷』とともに、日本人の郷愁をうたった名曲の双璧だ、と独断している。その「さとわ」の歩みをたどりたい。

まず、『日本国語大辞典』第二版の記述を引く。

さとわ〔里回・里曲〕（さとみ〔里回〕を中古以後、

誤読したことば）里のあたり。里の中。＊唱歌・朧月夜

（文部省唱歌）（以下略す）

なんとこの素っ気なさ。「中古以後」の出現としながら、用例が大正十四年の唱歌の一例だけとは、無責任も甚だしい。

『古語大辞典』も同じ扱いである。

かかる状況にあつて、『岩波古語辞典』の記述は簡潔かつ明快である。

さとうわ【里廻】《万葉集の原文「里廻」の古訓》↓さとも。「視渡せば近き」をたもとほり」〈万（元暦校本）一 二四三〉

この記述を敷衍すると、語義の記述は「さとも」の項に譲ったこと、今は用いられない「さとうわ」が、平安時代に書写された数少ない万葉集の写本のうち、元暦年間に校合されたと伝わる本にあるということである。この訓は、やはり平安時代の万葉集本文と訓を伝える『類聚古集』にもあり、長く行われたのである。

『言海』（明治廿二年）では「さとうわ 里曲」であったが、『大言海』（昭和八年）では「さとも 里曲一里廻」として、万葉集巻第七の「見渡せば」の短歌を挙げている。この「さとも」の訓を提示したのは、いつ、どこかの誰だろうか。

その人は江戸時代後期土佐の鹿持雅澄かもちまさずみであるらしいことが、『校本万葉集』で知られる。当該歌の「諸説」欄に「古」「チカキサトミヲ」とある。「古」は、鹿持雅澄の『万葉集古義』を指す。国語辞書の記述は、肝腎なところが抜け落ちて

いるのだ。

国書刊行会本の吉川弘文館オンデマンド版『万葉集古義』でその箇所を見ると、次のとおりである。全体の三分の二ほどを引く。

近里廻乎は、近き里のあたりなる物をの意なり、廻はミと訓べし。（ワと訓は古言に非ず、）浦廻、磯廻などの廻なり。

ここに言う「ミ」は、上二段動詞「転まる」の連用形が名詞に転じたもので、同様の複合語は、「島み」「裾み」などがある。奈良時代、この動詞は衰退にむかつており、後世の人々の意識から抜け落ちていたようだ。それが、万葉語「里廻」の適切な訓に到達しにくかった原因だと思う。

古語の履歴には、意外な展開が待っていたわけである。「さとうわ」はまほろしの日本語と言えるのだが、小学唱歌によって、国民の脳裏に深く刻まれたとおほしい。なお、NHKに「里和」の名を負う女性アナウンサーがいる。その名づけの由来は知らないが、その人の声に接すると、わたしはこの唱歌を思い出す。

鈍色

この二字、読者はいかに読むだろうか。

朝日新聞で漢字列「鈍色」に振仮名「にぶいろ」とあるのを見て、はてな、と思つたことが発端である（平成廿八年十二月十八日）。第四十三回「大佛次郎賞」を受賞した、浅田次郎の短篇集『帰郷』について、審査員のひとり、鷲田清一が寄せた文章、「曇りガラス越し」に」の中に、これはあつた。

新聞社は、使用する漢字について、常用漢字か否か、音訓表に合致するかなど、たいそう神経質であり、その杓子定規ぶりには不愉快になることさえある。それにしても、これは変である。漢字「鈍」の訓は「にぶい／にぶる」、漢字「色」の訓は「いろ」である。「鈍色」を「にぶいろ」と読むなら、振仮名は不要なはずである。それが、なぜ施されたのか。編集者は「ドンシヨク」と音読みされることを避けたのかも知れない。そうだったら、その編集者は「ニブイロ」を知っていたことになる。

筆者は著名な哲学者で、朝日新聞朝刊の連載「折々のこと

ば」は三千五百回を超える書き手である。四百三十字ほどのこの文章の、「慙愧」「憔悴」など五語に振仮名があるが、筆者自身が振つたものではあるまい。そして「鈍色」である。筆者は本当に「ニブイロ」と読まれることを意識して書いたのだろうか。

偶然、わたしは平安時代の喪服の「ニブイロ」を記憶していた。多分、源氏物語の若紫の巻を読んだ時に出会つたのだろう、光源氏が北山で、外祖母の喪に服している若紫を見たときの叙述にある。辞書によると、「にぶ色」も行われたようだが、圧倒的に「にび色」が優勢だったらしく、『古典対照語い表』の示す用例数は、源氏物語に十九回、蜻蛉日記に一回とあるが、「にぶ色」は皆無である。これは何を意味するのか。

その語い表によると、形容詞「にぶし」の用例数は、枕冊子と源氏物語の一つ、徒然草に二つだという。「にぶし」は、徒然草の書かれたころから見られる一方で、「にび」は衰退に向かったように見える。これは、日本語の形容詞の歴史を考えるうえで極めて重要な意味をもつ、とわたしは考えるなせか。

現代日本語のク活用形容詞から、語幹末の五つの母音毎に

一語ずつを掲げる。

高 (taka) い 大 (ooki) い 熱 (atsu) い
猛 (take) い 太 (huto) う

一見すると、語幹末に、五つの母音がそろっている。だが、語幹末母音が「i」であるク活用形容詞は「大きい」一語だけであり、しかも形容詞としての存在は室町時代以後なのである。

右の五つは現代語の形容詞らしい表情を見せているが、じつは、語幹末に「e」を有する形容詞「猛い」は実在せず、実在するのは、人名の「たけし」などの文語形、「むくつき男」「足繁く通う」など文語的な表現だけなのである。この形の形容詞の衰退については、拙稿「中世形容詞の終焉^(注)」で論じた。

「にび(鈍)」から形容詞が発生するには、語幹末の母音「i」の処理という、厳しい関門を通過しなければならなかった。そこで、その「i」を「u」に変えて通り抜けた、すなわち、「nibi」を「nibu」に変えた「にぶし」の語形を採用したのである。「にび色」も、「にぶ色」に変わって生き続けたのだと思う。

形容詞の語音構造に着目したのは北原保雄である。その研

究は高い評価に値することを、わたしは声を大きくして言いたい。北原の見解は、形容詞「ヒキシ↓ヒクシ」に関する論文に詳しいが、「にび」から「にぶ」への転換には言及しなかった。五十数年前、それは彼の視野に入っていなかったのだろう。

北原の論に、「鈍し」の卑見を合わせて提示しよう。片仮名表記は平安時代以前、平仮名表記は室町時代以降の語形である。アステリスタ(*)は非存在を意味する。

〈語基〉 〈複合語例〉 〈形容詞〉

ヒキ ヒキヒト(侏儒) *ヒキシ ひくし
ニビ ニビイロ(鈍色) *ニビシ にぶし

とまれ、形容詞「にぶし」の成立は、古語の構造の一面を語っていると思う。

そとも

『週刊日本の歳時記9』(小学館 平成廿年六月)には、「五月雨」の副題がある。その号の長谷川權の連載エッセイ「今週の歳時記」には、新古今和歌集から短歌を引いている。それを一行書きに掲げる。

あふち咲く外面そともの木陰露落ちて五月雨晴るる風わたるなり
藤原忠良

この筆者の俳句の解釈や鑑賞は、独自と言うか、特異と言うか、通説や私見と異なることがあって、わたしには気になる存在である。今回もそう思いながら放置していた。ある時、日本古典文学大系の新古今集をめくっていてこの歌が思い出された。それをAとして再掲し、『国歌大観』の歌番号も添える。

A あふちさく外面そともの木陰露落ちて五月雨はる、風渡るなり
324

第二句の「外面」は、底本の仮名書きを校注者の判断で漢字表記に変えたのだという。同じ巻の恵慶法師の歌をBとして挙げる。

B 我が宿の外面そともにたてる檜の葉のしげみにす、む夏は来にけり
320

これらの歌について、他の活字本をいくつか開いて見た。角川ソフィア文庫の『新古今和歌集』（平成十九年）の歌の本文は、両歌ともに仮名書き「そとも」で、語注と通釈には、A「家の外」、B「庭の外」とある。同じ著者による『新古今和歌集全注釈』（平成廿二年）も同じである。新編日本古

典文学全集の『新古今和歌集』も、本文「外面」に「そも」の振仮名があり、「家の戸外」とか「戸外」とか注記している。

これらの語注や通釈を読んで不可解なのは、例えばBの檜の木が「戸外にある」と詠むことの意味である。あえてそう詠むのは、檜の木が「戸内」にもありうることを含意するが、わたしにはそれが理解できない。戸内に檜の木があるなんて、どれだけ巨大な建物なのだろう、と考えてしまう。

ちよつと冷静に考えると、「そも」を「外面」と解することが、大きな見当違いであることに気づくはずである。奈良時代の日本語に、「そと」という語の存在は確認できず、『時代別国語大辞典上代編』は「そと」を立項していない。「そも」はあるが、それは「外面そとも」の約音形ではなく、「背そつ面おも」の約音形なのである。初級古文の学習用の古語辞典、『例解古語辞典』第二版（三省堂 昭和六十一年）は、「そも」の項に、一「背面」として万葉集の歌、二「外面」として平家物語の大原御幸の用例を挙げている。

新古今和歌集の注釈でも、右に引いた諸書とは解を異にする書もある。その一つ、新日本古典文学大系の『新古今和歌集』は、A歌について、第二句「そどもの木こかげ」の本文に、

「そもそも「うしろの庭をいふ。家のほかをも」(能因歌枕)」と注し、B歌の通釈は「わが家の後庭に立っている」とある。「そと」が「外」の意で日本語史に登場するのは、平安時代末期らしい。これについては、宮地敦子の論文「対義語の消長」の指摘が有益である。^(註)その宮地論文から実例三つを借りて示そう。

大宮の宇知にも刀にも光るまで降れる白雪見れど飽かぬ
かも (萬葉集 3926)

とに立てる人とうちに居たる人ともと言ふが……(枕草

子七十六段)

うち劣りのとめでた(大鏡伊尹(蓬左庫本))

結局、平安時代の歌語「そと」を「外面」とするのは勘違いによって生まれた古語だ、と言えよう。その誤用が進む状況について考えさせる記述が『俊頼髓脳』にあるので、新編日本古典文学全集『歌論集』から引いて示す。「一一季語・歌語の由来」としてまとめた記述の中ほど、本稿にBとして挙げた歌を引いて書いた記述である。

我が宿のそとにも立てるならの葉のしげみにすずむ
夏は来にけり

そとともといへるは、しりへといへる事なり。

歌語について特に敏感だった、いかにも俊頼らしい発言である。

俊頼の危惧した事態の進行を加速させたのは順徳院ではないか、とわたしはにらんでいる。院の歌論書『八雲抄』の「居処部」十九項のうちの「家」を、『日本歌学大系』別巻三から引く。

そともは家の外也。うづらなく人のふる家といへり。故郷心也。

をたけび

例えばプロサツカーのテレビ放送を見ていると、ゴールを決めた選手が、こぶしを挙げて大声を発したりする動作を、アナウンサーは「おたけび」と表現することがある。この「おたけび」って、なんだろう。

現行の小型の国語辞書のうち、『新選国語辞典』第十版から、論述に響かない部分は省いて引く。

おたけび 【雄たけび】「雄▲叫び」
「文章語」勇ましいさ
けびごえ。おさけび。「一をあげる」

「叫び」の上の小さな黒い三角は、これが常用漢字の訓では

ない旨のしるしである。この記述中の「おさげび」の用例には接したことがないが、『日本国語大辞典』第二版には、宮嶋資夫『金』（大正十五年）の用例を挙げている。

この辞書の「文章語」という指摘は、机辺の他書に見えないが、肯けるものがある。その数少ない用例が、古事記、萬葉集、日本書紀、祝詞など、ほぼ奈良時代の資料に限られるからである。

最古の用例は、古事記上巻のスサノヲの行動を叙したくだりに見える。祖神の命じた治世範圍に不服なスサノヲが、姉のアマテラスに会いに来るといので、姉神が厳めしく武装して弟神を待つくだり、古事記の原文は「伊都之男建踏建而」と書き、「建を訓みて多^{たけ}禰^ね夫と云ふ」と訓注している。この箇所に対応する日本書紀の「雄誥」にも、訓注「烏多^{むた}稽^け眉」がある。奈良時代、すでに解しにくい表現だったのだろう。萬葉集には「ますらをの思ひ多^{たけ}鷄^け備^ひ」(2354)などが見える。

日本書紀の本文「雄誥」の下字「誥」は「つげる」意が主であり、わたしの知る限り、古代に「さげぶ」の意で用いた形跡はない。なお、上代特殊仮名遣いと活用に留意すると、「たけぶ」のケは甲類で上二段活用、「さげぶ」のケは乙類で

四段活用、奈良時代には混同しにくいのであった。

「をたけび」を収載する辞書として早いのは、享保二年刊の『和漢音釋書言字考節用集』である。その巻八の言辭部、「凱^{トキノゴエ}哥」に続けて「鯢波、鬨、雄誥」があり、「雄誥」の左に「ヲタケビ」、下に「日本紀」がある。これによると、俗用は三百年前には行われていたようである。

『日本国語大辞典』第二版の用例に、『和英語林集成』第三版と幸田露伴『五重塔』を挙げている。『言海』に「雄々しく叫^なぶ」として古事記の用例だけを挙げるのは、俗解を広めている観がある。『古語大辞典』の語義記述は、原義と派生義を区別せず、「雄々しい叫び声を上げること。雄々しさを示すこと。」とするのは適切とは言えない。『広辞苑』第六版で、①に神代紀上の用例を挙げ、②に「いさましく叫ぶこと。また、その叫び声。」とするのは、時代を明記しない点^がきずである。

現代人もひとたび『古事記傳』七之巻に帰るべきである。

おわりに

本稿で直接言及した語は八つに過ぎない。そのうちの二つ、

「みすずかる」「たまゆらの」は、枕詞に分類されるたぐいの語である。枕詞が、本来もつていた意味や機能を正確に突き止めることは難しく、わずかに推測できる語は寥々たる数である。枕詞こそ消え果てた古語だ、と言えるかもしれない。

かつて、新日本古典文学大系『萬葉集』の校注作業に参加して別冊の『萬葉集索引』を編むとき、わたしの担当は「枕詞索引」であった。全巻の校注記事から枕詞を拾い挙げて、約四百の各語に簡単な釈義を試みた。その索引の第一ページには、「あがこころ」から「あしひきの」までの廿六語を収めている。そのうち十語は、「未詳」とせざるを得なかった。本稿で言及した「みすずかる」「たまゆらの」がその一面を語っていると言えるだろう。枕詞においてさえそうである。しからざる古語には、誤解誤用の危機が常に潜んでいる。

琵琶湖西南部の地名「ささなみ」は、おそらく湖面に立つ波への連想からであろう、早く「ささなみ」に変化したと解釈されている。「うつせみ」が、奈良時代すでに「空蟬」「虚蟬」と解されていたことは、萬葉集の表記に明らかである。これらも変容する古語の一面である。

古語は、それぞれの歴史を負って生きてきた。その命を少しでも長く保たせるすべは、それを運用する人々が、古語を、

古文を、正しく読み、深く解釈して後世に伝えるほかにはない。わたしはそう確信している。

注

- 1 「辞苑閑話・七」の題で『成城文藝』二百廿九号（平成廿九年）に発表し、著書『葦の髄からのぞく日本語』（和泉書院 令和二年）に再録した。
- 2 『論集 日本文学・日本語』3 中世（角川書店 昭和五十四年）に発表し、論文集『日本語史の諸相』（汲古書院 平成十一年）に再録した。
- 3 北原保雄「形容詞のウ音便——その分布から成立の過程をさぐる——」（『國語國文』第卅六卷八号 昭和四十二年）北原保雄「形容詞「ヒキシ」攷——形容動詞「ヒキナリ」の確認」（『國語國文』第三十七卷五号 昭和四十三年）。
- 4 宮地敦子「対義語の消長」（『國語國文』第三十七卷七号 昭和四十三年）

追記

昨年刊行された、上皇后の『歌集ゆふすげ』の四百六十四首のうちに、「たまゆら」を用いた二首がある。その歌題を頭記し、詠出年を括弧書して引く。

「朝風」たまゆらをいにしへの花揺らぎ頭つアルハンブラの朝風の中（昭和四十八年）
 「挽歌 昭和天皇を偲びて」今もなほ在すがに思ふ玉ゆらの過ぎてうつつの寂しきるかも（平成元年）

（令和七年九月卅日成稿）

（くどう・りきお 成城大学名誉教授）